週刊ST ONLINE

Mr.Islam MD. Moinul talked about Ritsumeikan Asia Pacific University where he graduated from and he also explained about the business project that he is now doing at MBA-IB, University of Tsukuba.

UNIVERSITY EDUCATION

グローバル化時代の大学教育を考える

其の5　大学で得たことの先にあるもの

最終回では、立命館アジア太平洋大学（APU）卒業生の吉田聖崇（せいたか）さん（26） とエムデ・モインさん（31）に話を聞いた。吉田さんは「早期卒業プログラ ム」により3年で APU を卒業し、大手証券会社に勤務。モインさんは、バ ングラデシュのダッカ大学から2年次に編入し、卒業後日本企業を経て、 現在海外自動車部品メーカーで働いている。卒業生は大学で学んだこと、 経験したことを実社会でどう生かしているのだろうか。

多国籍の学生が学ぶキャンパスでは、お 互い違っていることが当たり前であっても、 日本の社会ではそうはいかない。吉田さん は、社会に出て感じたことをこう話す。「多くの人から、外国人と接したり、積極 的に意見を言ったりすることにあまり慣れ ていないという印象を受けました」

だが吉田さんにとっては、APU で「鍛え られた」経験が職場で生きることになる。

「大学ではプレゼンテーションやディス カッションの機会が多く、意見をどんどん ぶつけてくる外国人を相手に発表したり、 まとめ役をすることで、サポートやマネジメントの方法も学べたりしました。ですから、 会社に入っても研修のときから同期社員よ り率直に意見が言えましたし、比較的個性 の強い社員が参加している会議でも、まと め役がしっかりこなせていると思います」

吉田さんは国籍の異なる同僚とも問題な くプロジェクトを進めることができ、英語 力や折衝能力が認められた結果、現在プロ ジェクトリーダーも任されている。

モインさん（左）と吉田さん

ボランティアで生かされている人脈

APU で吉田さんが得たものには、国際 的な人脈もある。大阪勤務時代に始め、現 在東京と大阪の2拠点で行なっている児童 養護施設でのボランティア活動に、多くの 国の友人が参加してくれているという。「一緒に活動しているのは、インドネシ ア、タイ、台湾、中国、シンガポール、カナ ダ、マリ出身の友達などで、各自が自分の 国のことを児童に伝えています」

活動内容は資料や写真を使って国を紹介 するほか、その国のお菓子を食べ、ゲーム をして、1日その文化に触れてもらうもの。

「児童には外国人との交流を通じて、グ ローバルな視野を持ってもらうだけでなく、 同じ年代のほかの子が学べないことを学ん で、自信を付けてもらいたいんです」

将来的には世界に組織を広げて、世界の 子ども同士がつながるような活動にしてい きたいと吉田さんは考えている。

人や国のために役に立ちたい

一方、会社で「アジア地域マネジャー」を 務めるモインさん。出張で「35 ヵ国くらい」 訪れているが、そのほとんどの国に知り合 いの APU 卒業生がいるというほど、多彩 なネットワークを持つ。将来国際事業コン サルタントになり、世界を豊かにしたいと の夢があるモインさんは、APU で得た人 脈を生かしてこの11月、日本人にマンツー マンで英語を教える団体を立ち上げた。

「日本は資源がない国なので、海外に出 て、英語でコミュニケーションする必要が あります。英語が苦手な日本人に英語を もっと勉強してほしくて、APU 卒業生の フィリピン人、日本人の友達と3人で、PIKT（ピクト）という会社を作りました。

学生が主な対象で、スカイプ（無料インター ネット電話）を使い、直接会話するような 感覚で英語が学べます。無料レベルテスト、 目的別コース（例：TOEIC、2000単語学習） があり、自分に合ったものが選べます」 先生となるのは、フィリピン大学のフィ リピン人卒業生たち。フィリピンの友人か ら、就職難で「最高学府」とされる同大を卒 業してもなかなか職がないとの話を聞き、 英語人口は世界第3位で、「優秀な人材」で ある彼らに白羽の矢を立てた。モインさん は、「この『知的フェアトレード』を通じて、 日本と世界を豊かにしたい」と話す。

そんなモインさんは、現在別のプロジェ クトも進行させている。大学の MBA コー スに通い、「全土の55%で電力へのアクセス がなく、今でもランプを使っている人がい る」という母国の電力状況を改善するため の計画実現に向け、努力しているのだ。

「大学の教授が紹介してくれた JICA（国 際協力機構）と組んで、バングラデシュに 15メガワット分の電力を供給するプロジェ クトです。これがうまくいったら、日本の 企業にも投資を呼びかけ、投資の実行可能 性の調査や、現地企業との合併案件の手助 けをしていきたいと思っています」

話を聞いた2人の描く将来像は異なるも のの、「誰かのために何かをしたい」という 点で共通していた。感じられたのは、子ど ものため、国のためにとの「志」だった。

これまでの「モノサシ」が通用しなくなり つつあるグローバル化時代。果たして「いい 大学」とは？　従来の価値観にとらわれず、 一人一人で考えることが大切だ。答えが 違ったとしてもいいのではないだろうか。（週刊ST 編集部・亀田 雅彰）